

■しまゆむた

知名町上平川集落の上平川大蛇踊り

齊藤 美穂 (沖永良部郷土研究所)

沖永良部島は各集落に多くの個性的な芸能が伝わる。なかでも知名町上平川集落の「上平川大蛇踊り」は、抜きん出て大掛かり、かつユニークな芸能だ。ある寺に現れた大蛇を坊主と小僧が経の力で退治するまでを描いた劇風の芸能で、確定的な出演者は坊主、小僧6人、女の幽霊(大蛇の化身)、イマオー2人、ミンギョウ2人、地謡(唄、三線、太鼓)。これに大蛇を操る人と最後の総踊りに出演する集落住民を含めると多数にのぼる。踊りのモチーフについては、歌舞伎や人形浄瑠璃の演目「道成寺物」の影響が研究者により指摘されている。1984(昭和59)年に県指定無形民俗文化財となった。

芸能の起こりについては『鹿児島民俗91号』村田熙氏の論考「大蛇踊りについて」(1988年)から抜粋し以下に記す。

踊の由来は約三百年位前、薩摩へ上国した上平川の幸村政孝という人が帰途、嵐にあい明国へ漂着、かの地で大蛇踊りを習い覚え、数年後帰国するが、途中琉球に寄り、台詞を琉球語に訳して楽劇に構成して伝えたもので、元禄十三年(一七〇〇)頃から踊り始めたという。

幸村政孝翁をまつたトゥヌチ神社は集落内にあり、政孝翁の子孫が代々守っている。質素な木製の神社のなかには、御神体である木製の座像があり、その像の背面に「与人相勤上国之砌麻(鹿?) 兒二而病死壇方南林寺元禄十二年来心口従居士卯九月十五中本庵也行年三十五喜美留間切与人先久間」と彫り込まれている。神社は普段、閉ざされているが

境内へは出入りできる。今年は5月19日、神戸公演(後述)の成功を祈願して神事が行われた。島外移住した子孫が帰省し、入院加療中の父に代わりはじめて祭主役を務めた。島内のイベント上演などの際に神事を行うということはないらしく、集落の住民にとっても珍しい光景だった。

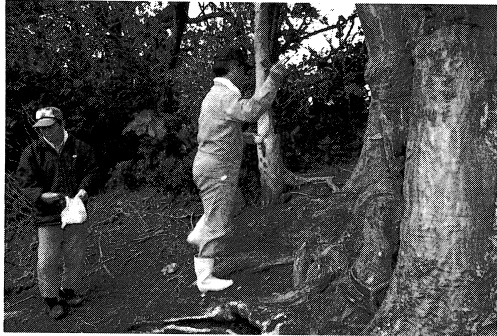
以下、大蛇の制作工程と踊りの実際についてを報告する。

大蛇等の制作

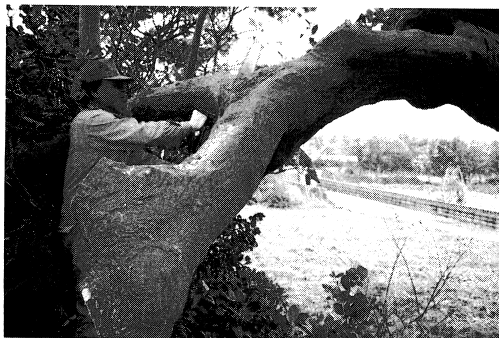
今年5月22日、神戸・尼崎の郷友会組織「上平川同志会」が主催する合同敬老会のメインイベントとして、郷土の誇りである上平川大蛇踊りの公演が神戸市内で行われた。その公演に向け、上平川集落では今年一月下旬から大蛇の制作準備が始まった。作り替えられたのは大蛇の頭(かしら)、大蛇の胴体、大蛇を吊るす三本柱で、大蛇を収納する竹籠の修復やイマオーが着ける面の塗り替えも行われた。かつては上演するたびに新しい大蛇を作り、上演後に本番同様に踊るノーシウドウイ(直し踊り)が終わると必ず炊き上げて処分してきた。しかし最近では多大な労力と時間を要するため大蛇その他は数度にわたって継続使用し、傷みが進んだらその都度に作り替えるのが常となっている。今回の大蛇頭の制作は約10年ぶりとのことだった。ここでは大蛇の制作工程について報告したい。

大蛇の頭用の木材の切り出しは今年一月三十日、知名町新城集落の森新秀さん宅であった。頭に用いるのはデイゴだが、集落内で調達できなかったため、娘が上平川に嫁いでい

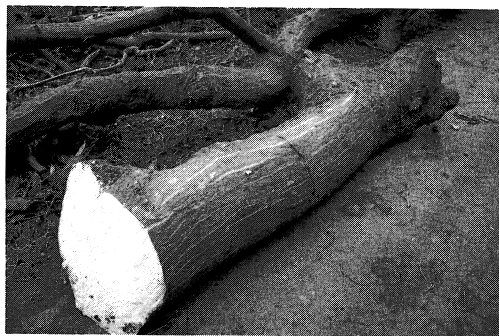
る縁で森さんが提供を承諾してくれたのである。



伐採前には木の周囲に焼酎、粗塩、生米をまき木の精に許しを請う。



チェーンソーで大振りの枝を切り出す。貴重なデイゴを提供してもらったお礼に、近くの電線にかかっていたデイゴの枝払いもボランティアで行った。

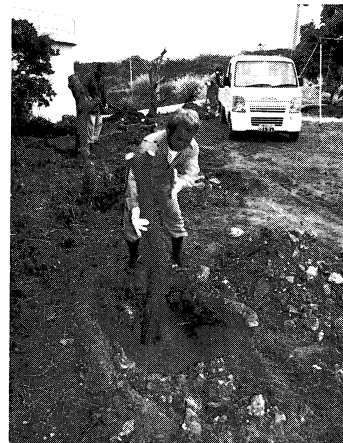


切り出したデイゴの枝。成人男性数人で持ち上げるほどの重さだが、乾燥が進むと他の

木材と比べ軽くなり、かつ丈夫だという。



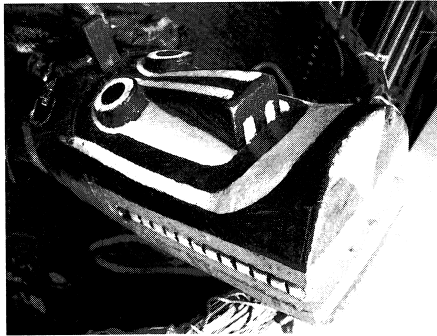
切り出したデイゴは表面の皮をチェーンソーで削り、完全に乾燥するまで放置する。木の乾燥には半年を要する場合もあるという。



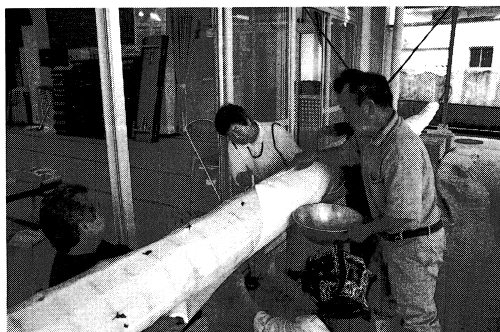
将来的に集落内でデイゴを確保できるよう、枝払いしたデイゴを伝承広場に移植した。伝承広場は屋外で上演できるように平成初頭に造成された広場で、一角には大蛇など踊りの大道具小道具を収納するための小屋もある。



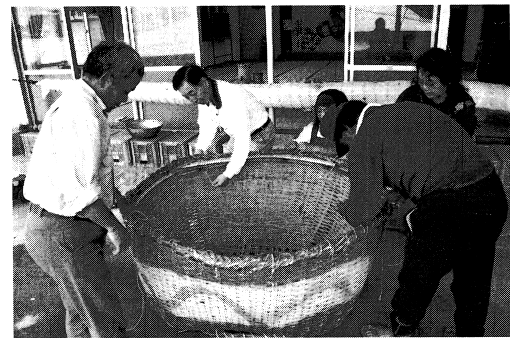
大蛇の頭の制作を今回担当したのは福川政雄さん(前頁写真左)。前任者の幸山和男さんが手がけたものを参考に制作した。チェーンソーやノミ、ツチなどで形を作り、最後にペンキを塗って仕上げた。



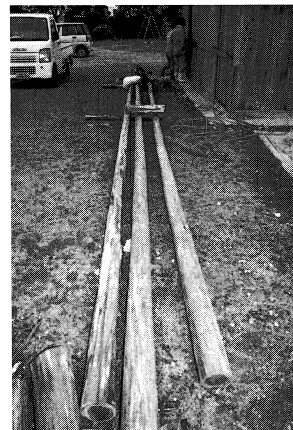
完成した大蛇の頭。基本的な柄のパターンはあるが色の指定はなく、福川さんの個性が出ている。口の中に火薬を仕込み、クライマックスで大蛇が火を噴くように演出するため、口の中は金属板で保護する。下アゴも動く。ちなみに大蛇にはデイゴでできた尾もあるが、今回は作り替えなかった。



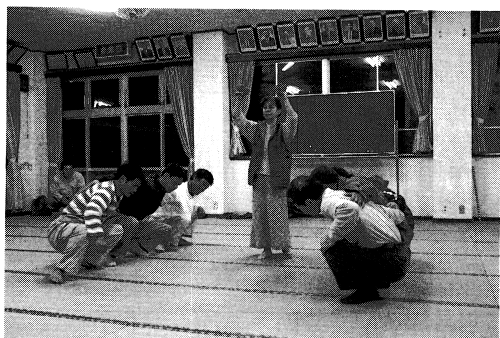
大蛇の胴本体の作り替えは今年4月20日に集落公民館で行われた。胴は張り子状。いくつもの竹材の輪の外側を木綿布でくるみ、糸で竹と布をくくりつけて、その上に紙を貼っていく。以前は和紙を7-8回もはり重ねていたため相当な重労働だったが、今回はロール状の上質紙を2度はり重ねた。ロープで宙ぶりにした骨組みと布に、糊を刷毛や手で塗り、紙をはっていく。乾燥したら青、黄、緑、茶、黒などのペンキを塗って、保護用のネットをかぶせて仕上げる。今回は着色の工程を見ることはできなかったが、婦人会や育成会など多くの住民が参加してにぎやかにいったという。大蛇の胴本体は10数メートルにもなる。



大蛇を収める竹籠(ジャバギ)の修復もあわせて行った。上下の枠をしっかりと作り直し、赤、緑、黄のスプレーペンキで色を塗り直して仕上げる。



大蛇を吊るすための三本柱（前頁）も今回、新しく大山から切り出した。神戸公演が屋内上演だったことから、運搬・搬入出がしやすいようにそれぞれを3つのパーツに分け、上演直前に組み立てられるよう細工した。



神戸公演に向けて今年2月中から練習が始まり、3月下旬から5月中旬の本番直前までは週1度のペースで続けた。

5月19日、トウヌチ神社であった神事には神戸公演出演者、同行者などが成功を祈願。神事の様子や御神体の写真は、筆者がパソコン操作を誤り消去してしまった。

踊りの実際

ここからは踊りの流れを紹介する。今年9月3日夕、和泊町民体育館で開かれた「えらぶ芸能あしび」（知名・和泊両町文化協会主催）で演じられた際の写真資料を用いる。また役者の台詞や唄の歌詞、意識は、出村卓三氏が平成10年に聞き取ったものを参考に氏の承

諾のもと記す。

シーン1



坊主が舞台中央に進み口上を述べる。

（坊主）ワンド大和ジュウサンニン チミタボウジ。クンド イチニヤクダティ 山寺ンカキティ チュウヤ イナカニンケー トクルニンケー イカニバシマン。クジュウユセテ 寺番ユウイヒチキラニバシマン。クジュウヨー、クジュウ（我は大和で十三年もつとめた坊主である。このたび一命が下り、山寺巡りをして昼夜となく田舎や都会など諸国へ行かなければならない。小僧を集めて寺番のことをよく言いつけねばならない。小僧よ、小僧）

シーン2



小僧6人が坊主の前にそろい、膝をついて話を伺う。坊主が言い渡す。

(小僧) ウー (はい)

(坊主) クン寺ヤ昔カラ ウンナキジ ウン
ナイチニントモ インナヨ クジュウ (この
寺は昔から女人禁制である。女は一人も入れ
るなよ小僧)

(小僧) ウー

言い渡しを終えたあと坊主は退場する。



シーン 3



女の幽霊が登場する。小僧たちを前に語り出す。

(幽霊) ナマイジルワミヤ エーシダケヌユ
ウリヨ 玉黄金サトガ イクトバナアリバ
左京ヌ橋ヒルク 渡イグルシャ クン寺ヌ長
老メ ムヌユウンヌキャピラー 旅ヌムンデ
ムヌ 宿カラチタボリ (いま出てきた私は、
えーし岳の幽霊である。大切な恋人がいたら
渡らなくてもいいのだが、左京の橋は長く渡
りにくい。この寺の長老にお願いを申し上げ
ます。旅の者ですが宿を貸してください)

(小僧) クン寺ヤ昔カラ ウンナキジ ウン
ナイチニントモ ナランナラン (この寺は昔
から女人禁制だ。女は一人としてならん)

小僧たちは頭を振って断る。

(幽霊) ジヒヨ ウ情キニ カラチタボリ (是
非お情けで貸してください)

(小僧) 唄ウドゥイ ダンダン スルヤリヤ
一夜カラチ (唄踊りをいろいろとするなら一
晩だけ貸してやろう)

シーン 4

幽霊が三線・地唄にあわせて舞い踊る。小僧たちは幽霊の力に酔うように体を揺らして聞き入る。途中、互いの肩をたたいて「起きていよう」と気をつけ合う。

このとき歌われる唄は、元唄はなく、幽霊の舞のためだけの節だという。

(地謡) 玉黄金サトガ イクトバナアリバ

(囃子) ヨウショウラ ウンナ (よく踊れよ女)

(小僧) ウキトゥリヨー, ウキトゥリヨー (起
きていなさい, 起きていなさい)

(地謡) 左京ヌ橋ヒルク 渡イグルシャ

(囃子) シャヨー ヨー ヨウシュウラ ダ
ンナヨー

(小僧) ウキトゥリヨー ウキトゥリヨー

幽霊に化かされ小僧たちは寝入ってしまう。
その隙に幽霊は消える。

シーン 5



小僧たちは化かされたことに気づき、あわてふためく。

(小僧) イヤー クマウッタ ウナグヤ
 マーイッタカ クマウッタ ウナグヤ マー
 イッタカ (やや、ここにいた女はどこに行っ
 たか)

小僧たちは鐘(竹籠)のもとへと寄る。

(小僧) クン鐘ヌシチャニ ウンナガ ゴロ
 エーゴロエー (この鐘の下で女がゴロゴロと
 いびきをかいて寝ている) ×3

そこへ坊主が帰ってくる。

(坊主) ハイ クジュウ ナニグトウカ (小僧、
 何か)

(小僧) クン鐘ヌシチャニ ウンナガ ゴロ
 エーゴロエー

(坊主) サーサー イジルトモ モロトモキ
 ムソロテ イニョーアギリ (さあさあ、出て
 来たら子ども気持ちをそろえて経を唱えなさい)

坊主と小僧、鐘(大蛇を収めてある竹籠)
 の近くに寄り、経を唱える。

(坊主と小僧) ターラト サーバク サーバ
 ン ダーラン ニョーニョーワ ×3

シーン6



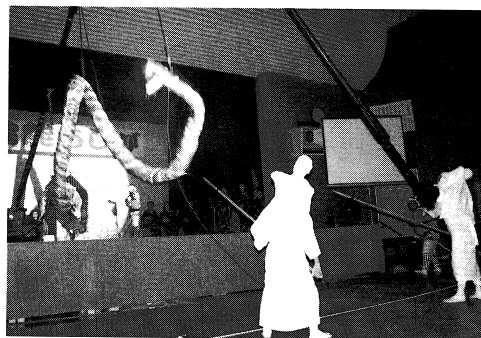
女の幽霊に化身していた大蛇が現れる。口
 から火を噴き、のたうつように暴れる。

大蛇は三本柱で組み立てた檣に取り付けた
 滑車で持ち上げる。大蛇には頭、胴、尾、下
 あごにロープがぐくりつけてあり、頭のロー
 プを滑車に通して引くと、あたかも大蛇が昇

天するように見える。操り手がロープをタイ
 ミングよく引っぱり合うことで、生きたよう
 に大蛇がのたうつ。下あごのロープを引くと
 上あごと衝突し大きな音が出る。体全体を
 使って行かう一番の重労働だが、名人級にな
 ると、大蛇が自分の尾を噛むような仕草も表現
 できるという。



仮面を着けたイマオーが登場する。芸能の
 ストーリーには参加せず、場内整理を手伝う
 役目で、この夜は、ひょうきんに周囲で踊っ
 たり、飛び散った火薬のゴミなどを拾い集め
 ていた。バケツを持っているのがイマオー、
 左側にいるのはミンギョウ。



手槍を持ったミンギョウ2人が登場し、大
 蛇乱舞の終盤では槍をつきさし退治する。退
 治された大蛇は再び籠のなかに収められる。

現在のミンギョウは、紙粘土で作った顔を
 載せたヘルメットをかぶり、人形の顔から下

は白い布をすっぽりかぶって登場する。以前に保存会員が創作した形といい、昔からこのようなミンギョウが登場していたのかは不明。

シーン7



大蛇が退治され、坊主が口上を述べる。小僧とともに喜び合う。

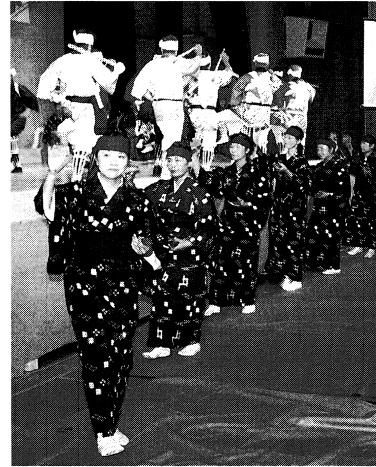
(坊主) 寺ジュウニム イワン イククニム
イワン ワガユキイッタ トクルハ スット
ユキ スッチヌクヨー (寺の人にも異国の人
にも申す。私が修行して会得してきたので、
さっさと私のあとについてきなさい)

(小僧) 嬉シイヤー 嬉シイヤー

(坊主) スッチヌクヨー スッチヌクヨー

これを繰り返しながら坊主と小僧が退場する。

シーン8



総踊りが始まる。地謡が集落で「シュンサミ」と呼ぶ唄を演奏し、それにあわせて輪踊りする。シュンサミはこの場合「めでたい」という意味で、大蛇が無事に退治されたことを村みんなで喜び合う様を表現している。ゆえに坊主などの登場人物のほか、イマオーやミンギョウ、大蛇の操り手などの裏方、婦人など多数が参加する。

男性は紅白に彩った棒を一本ずつ持ち、時々互いに打ち付け合いながら踊る。女性は両手に四ツ竹を持ち、カチカチと鳴らしながら優雅に踊る。

「シュンサミ」の歌詞は9番ほどまでであるが、上演するときどきにより、4番ほどで早めに切り上げたり、6—7番まで歌ったりするという。

以上、大蛇の制作工程と踊りの流れを紹介した。今回は特に大蛇の制作について記録が抜け落ちた工程があるが、幸い、上平川集落の住民の手によって一連がビデオ撮影されている。貴重な資料映像として広く活用されてほしい。

上平川大蛇踊りは、その大掛かりさゆえに地元であっても上演数は少ない。野外で上演することが前提であるため、屋内でのイベントなどでは、大蛇のシーンが映像で流されることも多い。今年は神戸公演で弾みがつき上

平川集落内の機運も高まったことから、島内で2度（屋外・屋内1度ずつ）も上演される幸運な年となった。一方、当初計画されていた集落内での上演（ノーシウドゥイ）は、悪天候などが災いして9月現在、実現していない。ちなみに集落内での上演は、ここ20数年間、一度もないとのこと。集落内の野外で演じ観賞されてきたという大蛇踊りの本来的な形を考えると、ぜひ近く実現させてほしいところだ。

またトゥヌチ神社の保存についても今後、集落内で議論されてくるだろう。前述した通り現在は幸村政孝翁の子孫が守っているが、担い手世代は島外に転出しており、将来に不安がある。むしろ集落の法人化を視野に、共有財産として集落全体で守っていく必要があると思う。